

2016年10月31日
公益財団法人イオン環境財団
生物多様性条約事務局

「The MIDORI Prize for Biodiversity 2016」(第4回生物多様性みどり賞)受賞者決定 - 12月2日(金)授賞式、12月7日(水)受賞者フォーラムを開催 -

公益財団法人イオン環境財団(理事長 岡田卓也 イオン株式会社名誉会長相談役、以下、当財団)と生物多様性条約事務局(カナダ、モントリオール)は、厳正な審査のもと「The MIDORI Prize for Biodiversity 2016(第4回生物多様性みどり賞)」の受賞者を決定しました。

今年の受賞者は、アルフォンソ・アギーレ＝ムーニョス氏(メキシコ)、ユーリ・ダーマン氏(ロシア)、ヴァンダナ・シヴァ氏(インド)の3名です。

当財団は、生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が名古屋において開催された2010年、当財団の設立20周年を記念し、「The MIDORI Prize for Biodiversity(生物多様性みどり賞)」を創設しました。本賞は、生物多様性の保全と持続可能な利用推進のためグローバルなステージで顕著な環境活動に取り組んでいる個人を顕彰する国際賞で、第2回(2012年)からは生物多様性条約事務局との共催により、隔年で実施しています。

第4回となる本年は、77カ国309名の候補者が審査対象となり、2010年に生物多様性条約第10回締約国会議で採択された「愛知ターゲット」や2011年に開始した「国連生物多様性の10年」の推進において大きな貢献があった上記3名への授賞を決定しました。受賞者にはそれぞれ、表彰楯、記念品、副賞(10万USドル)が贈られます。なお、授賞式ならびに受賞者フォーラムは下記のとおり実施します。

当財団と生物多様性条約事務局は本賞を通じて積極的な環境活動を支援するほか、これからも様々な活動を通じて生物多様性の保全と持続可能な利用の促進のために取り組んでまいります。

【授賞式】

1. 日程：2016年12月2日(金)
2. 会場：メキシコ カンクン ザムーンパレス ゴルフ&スパリゾート コンベンションセンター
生物多様性条約第13回締約国会議(COP13)閣僚級会合に併せて実施

【受賞者フォーラム】

1. 日程：2016年12月7日(水) 14:00~17:00
2. 会場：国際連合大学3F ウ・タント国際会議場(東京都渋谷区神宮前5-53-70)
3. 内容：(1) 受賞者講演
(2) 受賞者パネルディスカッション モデレーター 末吉 竹二郎 氏
国際連合環境計画・金融イニシアチブ 特別顧問
イオン環境財団 評議員、イオン株式会社 取締役

参考：受賞者フォーラム詳細資料

<http://www.midoripress-aeon.net/jp/index.html>

【The MIDORI Prize for Biodiversity 2016 受賞者について】

2016年2月から6月までの期間、本賞ウェブサイトからの公募と有識者からのノミネーションによる候補者募集を行い、77カ国309名の受賞候補者が推薦されました。有識者の専門委員会による選考を経て、審査委員会による最終審査が行われ、受賞者を決定しました。

アルフォンソ・アギーレ＝ムーニョス氏

島嶼生態系保全グループ 事務局長 (メキシコ)



多くの固有種が生息し豊富で多様な生態系を有するメキシコの島嶼地域において、侵略的外来種の駆除をはじめとする保全の推進にたゆまぬ努力を続けてきた。市民・女性・ユース・民間セクター等の多様なステークホルダーと連携しながら、4万ヘクタールを超える島嶼地域を生物圏保護区に設定。2016年には東太平洋に浮かぶ「メキシコのガラパゴス」レビジャヒヘド諸島のユネスコ世界遺産登録に貢献した。

ユーリ・ダーマン氏

世界自然保護基金ロシア アムール支所 所長 (ロシア)



淡水生態系への影響を懸念し、ロシア極東のアムール地域においてダム建設反対キャンペーンを5回にわたり実施。アムールトラ等、象徴的な希少種を旗印に個体数の回復に貢献した。科学的知見と伝統的知見を統合したアプローチにより設立された広大な国際連携保護区は、ロシア国境を越え中国・モンゴルにも及ぶ。生物多様性と気候変動の相互関係にも着目し、多くの人々に影響を与えながら難題に取り組み続けている。

ヴァンダナ・シヴァ氏

ナウダーニャ 創設者・代表 (インド)



「アース・デモクラシー（大地の民主主義）」の思想に基づき、農家の権利と生物多様性を守る伝統的な有機農法の普及等、主に農業・食糧分野において草の根活動を展開。社会的弱者や女性の視点に立ち、揺るがぬ信念をもって、生物多様性やバイオセーフティに関する世界との対話に貢献を果たしてきた。遺伝資源にかかる公正／衡平な配分にも寄与するモデルを実践し、持続可能な社会づくりにも大きな貢献を果たしている。

【The MIDORI Prize for Biodiversity 2016（第4回 生物多様性みどり賞）について】

1. 実施体制

主催：公益財団法人イオン環境財団

共催：生物多様性条約事務局

後援：環境省

2. 選考

(1) 審査基準

- ・国際的な貢献
- ・生物多様性の保全と持続可能な利用に対する貢献
- ・社会的な貢献
- ・長期的な視点と継続性
- ・創造性と新規性
- ・市民性と総合性
- ・実効性と波及力

(2) 審査委員会(敬称略、共催者代表以下アルファベット順)

審査委員長 岡田 卓也 (公益財団法人イオン環境財団 理事長)

審査委員 ブラウリオ・フェレイラ・デ・ソウザ・ジラス

(生物多様性条約 事務局長、The MIDORI Prize 共催者代表)

マリアナ・ベヨット

(国連開発計画 生物多様性資金イニシアチブ (BIOFIN-Mexico)、ナショナル・コーディネーター)

崔 在天 (韓国生態院 創設院長、梨花女子大学 エコサイエンス特別教授)

岩槻 邦男 (東京大学 名誉教授)

黒田 大三郎 (公益財団法人地球環境戦略研究機関 シニアフェロー)

あん・まくどなると (上智大学大学院 地球環境学研究科教授)

高野 孝子 (早稲田大学 留学センター 教授)

涌井 史郎 (東京都市大学 教授、国連生物多様性の10年日本委員会 委員長代理)

※The MIDORI Prize for Biodiversity ホームページ：<http://www.midori-press-aeon.net/jp/index.html>

【歴代受賞者】

第1回受賞者(2010年)

ジャン・ルミール氏

生物学者、探検家、映画製作者(カナダ)

グレッチェン・C・デイリー氏

スタンフォード大学 教授(アメリカ)

エミル・サリム氏

インドネシア大統領諮問会議 議長、元インドネシア人口・環境大臣 (インドネシア)

(国際生物多様性年) 特別賞

アンゲラ・メルケル氏

ドイツ連邦共和国首相(ドイツ)

第2回受賞者(2012年)

ファン・カルロス・カスティーリャ氏

チリ カトリカ大学 教授(チリ)

ロドリゴ・ガメス＝ロボ氏

コスタリカ生物多様性研究所 代表(コスタリカ)

ボ・クイ氏

ベトナム国家大学ハノイ校 自然資源管理・環境研究センター名誉総長(ベトナム)

第3回受賞者(2014年)

カマル・パワ氏

アショーカ生態学環境研究トラスト 代表、

アルフレッド・オテング＝イエボア氏

マサチューセッツ大学 ボストン校 特別教授(インド)

ビビアナ・ヴィラ氏

ガーナ生物多様性委員会 議長(ガーナ)

ビクーニャ/ラクダと環境 学際研究プロジェクト 代表

アルゼンチン学術研究会議 主席研究員(アルゼンチン)

【公益財団法人イオン環境財団について】

公益財団法人イオン環境財団は「お客さまを原点に平和を追求し、人間を尊重し、地域社会に貢献する」というイオンの基本理念のもと、1990年に設立されました。設立以来、国内外での植樹や、環境活動に取り組む団体への助成、生物多様性への取り組みを主な事業として、さまざまな活動を継続しています。2010年に日本で生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）が開催されるのに先立ち、2009年には隔年開催の国内賞「生物多様性日本アワード」を創設し、「The MIDORI Prize for Biodiversity（生物多様性みどり賞）」と交互に実施するなど、生物多様性の問題に取り組んでいます。

公益財団法人イオン環境財団ホームページ：<http://www.aeon.info/ef/>

【生物多様性条約事務局について】

生物多様性条約（正式名称：生物の多様性に関する条約）は、1992年にリオ・デ・ジャネイロで開催された国連環境開発会議（地球サミット）で採択された国際条約の1つで、1993年に発効しました。同条約は、生物多様性の保全とその構成要素の持続可能な利用、遺伝資源の利用から生じる利益の公正で衡平な配分を目的としています。

日本は1992年に署名し、1993年に加盟しました。現在、196の国と地域が同条約を締結しています。生物多様性条約事務局はカナダのモントリオールにあり、国連環境計画（UNEP）の下で運営されています。

生物多様性条約事務局ホームページ：www.cbd.int/

ご参考

The MIDORI Prize for Biodiversity 2016 受賞者について



アルフォンソ・アギーレ＝ムーニョス氏
島嶼生態系保全グループ 事務局長（メキシコ）

自然科学と社会科学とを統合した学際的なアプローチを採用し、アルフォンソ・アギーレ＝ムーニョス氏は、過去 40 年間にわたりメキシコの沿岸・島嶼部・海洋、とりわけ豊富で多様なメキシコ島嶼部の生態系の保全と持続可能な管理に、たゆまぬ努力を続けてきた。先進科学知識を応用し、大規模で、戦略的で、実際の保全・回復活動を行ってきた彼の業績は、比類なく模範的なものである。

またアギーレ＝ムーニョス氏は、15 年にわたり、メキシコの市民社会機構「島嶼生態系保全グループ (Grupo de Ecología y Conservación de Islas, A.C., GEI)」の事務局長を務めてきた。GEI では、熟達し専門性が高く信頼の厚い若き 100 名の専門家が、応用研究、海鳥の個体数および植生コミュニティの回復、侵略的外来種の駆除、環境教育、アウトリーチ活動、島嶼部のバイオセキュリティ、コミュニティ開発、公共政策、国際協力といった活動に従事している。

アギーレ＝ムーニョス氏が不屈の努力によって成し遂げた保全活動の成果は、メキシコだけでなく世界各国の島嶼部の保全にも大きな影響を与えた。彼のリーダーシップに基づき、今日までに侵略的外来種の哺乳類 59 頭が 37 のメキシコ島嶼部から駆除されている。このことは、5 万 ha を超える、ユニークな特性を持つ島嶼部の生息地が回復されていること、また世界的な生物多様性に幅広い影響を与えていることを意味している。こうした活動は、連邦政府機関、メキシコ海軍、地域の漁業者コミュニティ、国際機関、外国政府、学術機関、大学、幅広い寄付者のネットワークといった、彼の手腕による多様なパートナーとの積極的な協力体制の成果である。

アギーレ＝ムーニョス氏は、メキシコ政府による 2 つの生物圏保護区、グアダルペ島とバハ・カリフォルニア州太平洋諸島の創設の礎となった研究等、公共政策における実績も有する。こうした努力によって、現在、メキシコの全ての島嶼部が保護されている。また近年、「メキシコのガラパゴス」レビジャヒヘド諸島を UNESCO 世界自然遺産に推薦する業務を取りまとめたことでも、連邦政府に貢献を果たした。

20 年前には、メキシコの全ての沿岸周辺地域を法的に確立された保全地域とするよう提案。この革新的なツールによって、現在、数百キロメートルに及ぶ豊かなメキシコの沿岸が保護されている。こうした彼の業績は、愛知ターゲットの目標の多くに寄与している。

こうした傑出した業績により、アルフォンソ・アギーレ＝ムーニョス氏は、The MIDORI Prize に誠にふさわしい人物であるといえる。



ユーリ・ダーマン氏
世界自然保護基金ロシア アムール支所 所長 (ロシア)

ユーリ・ダーマン氏は、アムール・エコリージョン・プログラム (Amur Ecoregion Programme) において素晴らしいリーダーシップを発揮してきたロシアの保全活動のチャンピオンである。彼は、世界十大河川の1つであるアムール川において、40年間にわたり専門家としての責務を献身的に果たしてきた。同氏は1989年よりダムが淡水生態系に及ぼす影響を調査し、アムール川本流におけるダム建設反対キャンペーンを5度にわたり実施。アムールトラ、アムールヒョウ、東洋コウノトリのような象徴的な希少種を旗印として掲げ、科学的知見と伝統的知見を統合し、生物多様性保全のための包括的プログラムにまとめあげた。こうした彼の多大な努力により、同地域の保護区を増大させ、個体数を回復させることができたのである。

ダーマン氏は「保護区ネットワーク構築プログラム (Programme for Protected Area Network)」の計画・実施に主導的な役割を果たしてきた。現在、この保護区ネットワークは、アムール・エコリージョンの12%を占めるに至っている。さらに彼は、4万頭に及ぶシベリアノロジカの移動個体群と北方タイガ地帯および北部湿地帯の生物多様性を保護するため、科学的な裏付けに基づいて、ノルスキー自然保護区、オルロフスキー連邦保護区、7つの州立野生生物保護区の設立に貢献を果たした (総計 98 万 ha)。さらに、日本野鳥の会、東京大学、北海道大学と協力し、ツルおよびコウノトリの渡り経路に関する大規模調査を実施。調査結果に基づき、重要な中継地および繁殖地の全てがアムール川および支流流域の保護湿地帯に指定された (94.3 万 ha に及ぶ 12 の新たな保護区)。2000 年からは、アムールトラの保護区のネットワーク形成に注力。国立公園や生物回廊に関連した革新的な取り組みを含め、彼の努力により、200 万 ha に及ぶ保護区が創設された。最大の成功は、2015 年にビキン国立公園 (116 万 ha) が指定されたことである。密猟対策と法整備をあわせて実施することによって、現在、アムールトラの生息地の 25% が保護されており、成体個体数は 350 頭から 430 頭へと増加している。

こうした保全活動を成功裏に行うには、市民社会との連携、政策策定への取り組み、国際協力がそれぞれ不可欠である。ダーマン氏はアムールヒョウの最後の個体群を保護する「生き残りを残らず救おう (Save each of the survivors)」キャンペーンを主導。その結果、このきわめて希少なネコ科動物は絶滅を免れ、個体数は 30 頭から 80 頭に回復した。また、ロシア連邦政府により設立された、26.2 万 ha (残存種の生息地の 60%) にわたる「ヒョウの森 (Land of the leopard)」連邦保護区も、こうした努力の賜物である。さらに、劣化した生息地を回復させるため、森林火災予防 (延焼面積を大きく減少) および森林再生 (150 万本のチョウセンゴヨウの苗木を植林) に関するイニシアティブを実施した。こうした彼の保全活動はロシア国内にとどまらない。アムール川沿いに国境を接する自然保護区の連携は、中国とモンゴルとの協力による大規模な国際イニシアティブ「アムール・グリーンベルト (Amur Green Belt)」のもとで行われている。

ロシア／ドイツ気候イニシアティブ (Russian-German Climate Initiative) においては、木材を伐採しない非木材林産物の持続可能な利用を確保する大規模なプロジェクトを綿密に計画、実施。ダーマン氏は、生物多様性と気候変動の相互関係に着目し、現地での影響力の大きな活動を通して、生物多様性に関する重要な課題に取り組み続けている。

以上の理由から、ユーリ・ダーマン氏が生物多様性に果たした貢献は顕著であり、The MIDORI Prize の受賞者にふさわしい。



ヴァンダナ・シヴァ氏
ナウダーニャ 創設者・代表 (インド)

ヴァンダナ・シヴァ氏は、「アース・デモクラシー（大地の民主主義）」の理念に基づき、生物多様性を保全し、種苗を守り、農家の権利を保護する伝統的な有機農法の推進に生涯を捧げて取り組んできた。1990年代中頃以来、同氏は伝統的な知見と生計手段、持続可能な農業と生物多様性の保全、とりわけ、インドの女性、小規模農家、先住民および地域コミュニティといった、小規模コミュニティや社会的弱者のグループを支援してきた。シヴァ氏が創設した「ナウダーニャ (Navdanya)」は、インド 18 州にわたる種苗管理者と有機農産物生産者のネットワークであり、持続可能な農業や農業生態学的技術に関するトレーニングを実施する機関である。

ウッタラーカンド州にあるナウダーニャの農場では、2,300 種以上の稲、小麦、大麦、オート麦、カラシ、キビ類、豆類、スパイス、野菜、薬用植物が保全されている。またこの実験農場では、革新的な農業生態系技術を発展させ、地域の資源や生物多様性研究に応用している。2004 年には、学習センター「地球大学 (Earth University)」を設立。現在までにナウダーニャは、インド国内に 122 のコミュニティ・シード・バンクを設立、80 万人以上の農業従事者に対し、種苗の保全、食料の主権、持続可能な農業に関するトレーニングを行ってきた。また、同国において最大の有機農産物のフェア・トレード市場の設立を支援してきた。

ナウダーニャにおいては、女性が重要な役割を果たしている。「多様性のための多様な女性達 (Diverse Women for Diversity)」は、シヴァ氏によって 1995 年に始められた世界的なムーブメントである。このムーブメントは、種苗に関する女性のスキル、知識、生計手段、健全で伝統的な食料の加工を推進することで、女性を支援し、社会に利益をもたらすものである。

「希望の種 (Seeds of Hope)」プロジェクトは、ナウダーニャの地方レベルでの活動の効果を物語る好事例である。2011-2015 年、ウッタラーカンド州の農場でトレーニングを受けた 486 名の農業従事者 (95%は女性) が、有機農法への転換によって 55%の余剰生産をあげ、13 のコミュニティ・シード・バンクを運営するに至った。これによって生物多様性は 25%増加し、土壌の質は 10%向上した。また、お祭り、マルシェ、情報交換などが行われ、生物多様性、食料の主権、種苗に対する農家の権利についての認識が高まった。さらに、ナウダーニャの生物多様性に基づく農業によって、食料安全保障と栄養とが向上した。1 エーカー当りの栄養摂取と健康度を測定したところ、生物多様性を保全することで、インドの食料供給が 2 倍となることがわかった。また、1 エーカー当りの富によって測定される真実原価計算によると、社会的弱者である小規模農家の収入が 10 倍に増加することがわかった。よって、彼女とナウダーニャの活動は、「持続可能な開発目標」の中でも目標 1. 全ての場所における、あらゆる形態の貧困の解消、目標 2. 飢餓の解消、食糧安全保障と栄養の向上の達成、持続可能な農業の促進、目標 5. ジェンダー平等の達成、全ての女性および少女への権限と能力の付与、目標 12. 持続可能な消費及び生産様式の確保、目標 13. 気候変動及びその影響に対処するための緊急な行動、そして、生物多様性の損失の停止を含む目標 15 に貢献しているといえる。「希望の種」プロジェクトは、コミュニティの食の安全における女性の主導的な役割を大いに支援するものである。気候変動のメカニズムや問題点を理解し、消費者である市民の支援を得ることで、農業従事者は生産習慣を変えることができるのである。

またシヴァ氏は、作物栽培学・経済学の研究手法・知見に基づいて、国内外の政策に影響を与え、生物多様性、遺伝資源へのアクセスと利益配分、バイオセーフティに関する世界との対話にも貢献を果たしてきた。シヴァ氏は、インドの小規模農家と共に選択的な解決策を推進し展開してきた。また専門家として、生物多様性条約、インドの生物多様性法、植物の多様性と農家の権利に関する法、森林権利法に貢献を果たした。意欲的な政策に対する彼女の大きな影響力は、地球の生物多様性と人権を守るための世界的な協力関係をも形成している。

以上に述べたヴァンダナ・シヴァ氏の偉大な業績は、本賞の理念に一致している。よって彼女は、The MIDORI Prize の受賞者にふさわしい人物である。